2023年4月2日佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マルコ15章33～41節
タイトル：あなたは見捨てられない

「キリスト者として長い信仰生活をされた方が、いよいよ亡くなる時、『南無阿弥陀仏』と言って亡くなられた」という話を聞いたことがあります。結局、新生されていなかったということでしょうか…。いずれにしても、死の時に、もしかしたら心の深いところにある本音が出て来るのかも知れないと思うことです。認知症になられてからも「主よ、日本にリバイバルを！」と叫んでおられた方の話も聞いたことがあります。願わくは「信仰の証しをしながら世を去って行くことが出来れば…」と思います。死の時に本音が出るとしたら、だからこそ、イエス様の時代も、死の直前に語られた言葉、処刑される者が瀕死の状態で語る言葉は、重要視されたのです。

今日は「棕櫚の聖日」です、ある意味で「喜びの聖日」ですが、この週の金曜日には、イエスは十字架に架かられます。そこで続けて受難の記事を学びます。今朝の箇所で、イエス様はいよいよ十字架上で息を引き取られます。その時にイエスが言われた言葉は「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)という言葉であったと、「マルコ福音書」は記します。そして「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)と語りながら亡くなって行かれるイエス様を見て、十字架刑を執行していたローマの百人隊長が「この方はまことに神の子であった」(15:39)と言ったのです。その告白を導くのは、おそらくイエス様の「わが神、わが神。どうして…」(15:34)の言葉です。この言葉は、どのような意味を含む言葉なのか。私達にどのようなメッセージを語るのでしょうか。「内容」と「メッセージ」に分けてお話しします。

1：内容～私達の代わりに神に見捨てられる主イエス

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)という言葉は「詩篇22篇」の言葉ですが、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」というのは、イエスが話しておられたアラム語の言葉です。「マルコ福音書」は、イエスが語られたそのままの言葉を保存したのです。「詩篇22篇」は、不思議な詩です。そこには十字架の光景が描かれています。「22篇1節」が、イエス様が十字架上で叫ばれた言葉です。「22篇7～8節」:「私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。『主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから』」(詩篇22:7～8)は、イエスの十字架を見た人々がイエスをバカにして言った言葉そのものです。そして「22篇18節」:「彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします」(詩篇22:18)は、「マルコ15章24節」で兵士達がしていることです。それで「詩篇22編」は、「十字架を預言した詩篇」とされて来ました。しかし、「詩篇22篇」は、例えば「4節～5節」で「わたしたちの先祖はあなたに依り頼み、依り頼んで、救われて来た。助けを求めてあなたに叫び、救い出され、あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」(詩篇22:4～5「新共同訳」)と、神の救いを褒め称えるようになるし、貧しい者に勝利を与える神の力、神の勝利を讃美する、そのような調子に変わって行くのです。それである人々は「イエスが十字架の上で叫ばれたのは『絶望の言葉』ではなくて『勝利の言葉』だ。勝利を確信して歌った『勝利の讃美』の最初の言葉が、たまたま『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか』(15:34)という言葉だったのだ」と言います。「ここに『絶望』を読み取ってはいけない」と言うのです。(私はかつて遠藤周作の本を読みあさっていたことがあるのですが、彼もそういう立場からイエスの本を書いていたのを覚えています)。

しかし私には、何か違和感があります。神の勝利を歌いたいのであれば、そのような「詩篇」は、他にも沢山あります。わざわざ「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てに…」(15:34)という言葉で始まる詩を選ぶ必要はない。ある教会の献堂式に伺った時、プログラムに印刷してあったのは、「詩篇127篇1節」「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい」(詩

篇 127:1)の言葉でした。また星野富弘さんがご自分の結婚式で配った色紙に書いたのは、「詩篇 119 篇 71 節」「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇 119:71)の言葉でした。それぞれ、その時のご自分方の心境を代弁する「詩篇」の言葉を選んで、いわば信仰を告白しておられるのです。「詩篇」というのは、そのように信仰者の思いを代弁する不思議な本です。イエスも「詩篇」に親しんでおられました。最後の晩餐で歌われたのも「詩篇」でした。まだガリラヤで伝道活動をしておられた時、会堂の礼拝においても、会衆と共に「詩篇」を歌われたことでしょう。その中で「詩篇 22 篇」は、それが会堂で読まれる―(歌われる)―時、それは「他民族に支配されて『私達は見捨てられたのだろうか』と嘆きながら、しかしなおも『将来に主の勝利を信じて讃美したい』、そのような思いで歌われただろう」と言われます。この時、イエス様は、十字架の苦しみの中でご自分の深い思いを「詩篇」の言葉に載せて告白され、祈り、語られたのだと思うのです。

であれば「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)とは、どういうことなのか。もちろん、この詩がやがて勝利の讃美に変わることを、イエスはご存知でした。だから先に望みを見ておられたでしょう。しかし、十字架に架かっておられる正にこの時、イエスは、神に捨てられるという絶望的な深い痛みを覚えておられたのだと思うのです。「神に捨てられる経験」をしておられるのです。人々はイエス様を嘲りました。「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王さまなら、今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ。』と言っているのだから」(マタイ 27:42～43)。しかしイエスは、十字架から降りて来られません。では、神は、何も為さらないのか、何も働いておられないのか。そうではありません。神は、イエスに働かれたのです。どういう形で働かれたのか。神は、イエスを突き放す、イエスを見捨てる、そういう形で働いておられるのです。イエス様は、ここで父なる神様に見捨てられているのです。

随分前ですが、最高裁判所の判事かどなたかが、「人は死んだらゴミだ」と言われたそうです。要するに「人は死んだら何も無くなってしまうのだ」ということでしょう。私はそれを聞いて、「『人は死んだらゴミだ』と思いながら生きて、死んで行くとしたら、あまりにも虚しい」と思ったのを覚えています。しかし「人は死んだらゴミだ」と言う人達は、どこかで「死」というものを甘く見ているのかも知れません。「死」とは何か。それは、愛する人達との関係を絶たれることです。突き放されることです。あるいは、自分が自分でなくなること。色々な形容が出来るでしょう。しかし、根源的な問題として、「死」というのは―(キリストがなければ、十字架がなければ)―神に裁かれ、神から捨てられることを意味するのです。それがどんなに激しい痛みなのか、どんなに恐ろしいことなのか、私達には分らないのです。「神から切り離されたその状態が正に地獄である」という意見があります。その意味で、正に今、イエス様がそのような状態―(地獄)―を経験しておられるのです。それが「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)という絶望の言葉なのです。

しかしなぜ、「神の子」であるイエスが、神に見捨てられ、神から突き放されなければならないのか。それは、イエスがここで人になり切って下さっているからです。この苦しみは、本来、神の子イエスではなく、私達が経験すべきことなのです。神の御心に背いて生きている私達が、その当然の報いとして、神から捨てられる経験をするはずだったのです。しかし、ここでイエスは、人になり切って、私達の身代わりに神に捨てられる経験をして下さっているのです。地獄に落ちておられるのです。私達の罪を背負って私達の代わりに地獄に落ちて下さった、それが「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)の言葉なのです。十字架の言葉で最も有名なのは、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)でしょう。しかし、イエスが人々の赦しを執り成しておられるということは、人々の罪を背負って神から見捨てられる経験を為さる、ということとセットなのです。

では百人隊長は、イエス様の叫びをどのように聞いたのでしょうか、何を感じ取ったのでしょうか。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)。この言葉は、そのように絶望の叫びでした。しかし、イエスは絶望の只中にありながら、しかし、なおも神だけに向かわれるのです。「わが神、わが神。どうしてわたしを…」(15:34)、「詩篇」のこの言葉は、「祈りの言葉」でもあります。ですからある人は「イエスは、十字架の上で神を礼拝していた」と表現しました。イエスを嘲る人々、イエスを苦しめる人々がいる。しかしイエス様は、沈黙を守られる。沈黙を守るということは、神に聞こうとしておられたということです。「礼拝しておられた、神の働きを待っておられた、神の為さることを喜んで受け入れる姿勢を取っておられた」と言っても良いかも知れません。苦しみの中、絶望の中で、なおも神に向かって、神との関係に生きておられた。そして「37 節」で「大声をあげて息を引き取られた」(15:37)。この「大声」というのは、おそらく「ヨハネ 19 章 30 節」にある「完了した―(成し遂げられた、終わった)」(ヨハネ 19:30)という言葉です。イエスは、ご自分が神の御心に従い、人々の罪を背負い、人々の代わりに裁かれた、それによって贖いが成し遂げられた、人が神と和解出来る道が備えられた、そのことを理解されたのではないでしょうか。

百人隊長は、詳しいことは良く分からなかったでしょう。しかし、こんな風に死んで行く人を見たことはなかったのです。多くの人は、人を呪い、人生を呪い、恨みをぶちまけながら死んで行くのです。しかし、イエスは、民衆を呪うでもない。ローマ兵を呪うでもなかった。どこまでも、ただ神に向かおうとされる、どこまでも礼拝を続けようとされたのです。人間には表現出来るはずがない神との関係、それを見て百人隊長は、「イエスの父なる神」の存在を信じずにはいられなくなった、イエスが神の特別の存在であることを認めざるを得なくなったのではないでしょうか。その意味で、私達が礼拝をするということ、それは、神の存在を証しする大切な行為なのです。だから主も、私達の礼拝を喜ばれるのです。いずれにしても、イエスが私達の代わりに苦しんで下さった、それが、この箇所が伝える話なのです。

2：メッセージ～主イエスの苦しみ故に神に見捨てられない私達

イエスは、人間の深い絶望を経験して下さいました。それは何を意味するのでしょうか。私達に具体的にどのように関わるのでしょうか。

「いのちの電話」の活動をしておられた江見太郎という方のお証しを読んだことがあります。1 人の日本人女性の話です。彼女は、戦前、満州に渡っていましたが、ソ連軍の侵攻によって広大な満州を逃げ回らなければならなくなり、敗戦国民の悲惨を味わいます。身も心もボロボロになりながら、そして飢えと病気で這うようにしながら、それでも子供達の手を引いて釜山に辿り着きます。やれやれと思ったのも束の間、体力のない末娘が目を開けたまま死んでしまうのです。子どもの不運を思うとたまらない。「悲しみもここまで来ると涙さえ出てこない」と言っておられます。ようやく釜山から博多について、同船した女性に荷物を託してトイレに行ったら、その女性は荷物を持ったまま消えていました。込み上げる怒りに絶叫するのです。「祖国だけは、同胞だけは」と信じていた気持ちが裏切られ、人間不信に陥ってしまいます。食べるために無我夢中で働きましたが、栄養失調と不衛生のために、今度は次女が亡くなります。次女は、かつて満州で教会学校に通っていました。だからでしょう、「母さま、また天国で会いましょう」と言って亡くなるのです。必死の看病のかいものなく次女が亡くなり、気丈なこの女性も完全に打ちのめされるのです。そして自殺の名所、和歌山県白浜の三段壁に来て、そこで江見牧師に出会ったのです。牧師は、その悲惨な半生を聞いて、何にも言う事が出来ませんでした。ただ「聖書」を開いて「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)の言葉を見せたのです。その言葉を見た女性に驚きの色が走り、彼女は泣き出したのです。江見牧師は言っておられます。「計り知れない悲しみの人であるイエス・キリストの十字架の上での叫びは、彼女の心を激しく打たずにはおかなかった。絶望の果てに見出したキリストとの出会いは、彼女の否定的

な人生観の終わりを告げた」。

私達も、苦しみの時、同じ苦しみを味わった人のことを思うだけでも慰められます。この女性は、十字架のイエス様に、自分の絶望を受け止めて下さる方、自分よりもさらに深い絶望と悲しみを知っている方、それを見たのだと思います。そのような神だからこそ、自分の全てを、悲しみも嘆きも全てを預けることが出来たのではないでしょうか。私達が経験するどんな苦しみよりも、イエスはさらに深く、さらに大きな絶望を苦しんで下さった。私達の苦しみの外側には、いつも私達のために苦しんで下さったイエス様の苦しみがある。それはつまり、イエスが関わって下さらないような私達の苦しみの経験はない、ということではないでしょうか。私達が神に見捨てられたように思うことがあったとしても、そこでイエスは私達に言われるのです。「私があなたに代わって神に見捨てられる経験をしたから、あなたは神に見捨てられることはない」。「わが神、わが神。どうしてわたしを…」、この祈りは「わたしが苦しんだのだから、あなたは神に見捨てられることはない」というメッセージとして聞こえて来るのです。

さらに言えば、私達が神の助けを最も必要とする時、それは「死」の時ではないでしょうか。「『死』において、最も恐ろしいのは、孤独になることだ」と、聞いたことがあります。だからこそ、神様に共にいて欲しいのです。しかし本来、神様には「死ぬ」ということがないのです。言い方は悪いかも知れませんが、神様は、私達の死を共有出来ない。しかしイエスは、死んで下さった方だから、死んで甦って下さった方らだから、私達は、私達が死を通る時も、イエス様が共に居て下さって、私達を天国に導いて下さることを信じることが出来るのです。きっとそこでもイエス様は、「あなたは神に見捨てられることはない」と語って下さるに違いなのです。

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(15:34)、私達は「イエスが私のために苦しんで下さった、私のどんな嘆きよりも深い嘆きを味わって下さった」、そのことを忘れてはならないと思います。それを忘れると「私が神に見捨てられる苦しみを苦しまなくて良いように、主が既に苦しんで下さった、私はいつも主の苦しみに支えられてある、私は御手の中にある」ということを忘れ、神の臨在を見失ってしまうことになると思うのです。私達は、試練の時、嘆きの時こそ「わが神、わが神。どうしてわたしを…」(15:34)というイエス様の叫びを思い出したいと思います。そして「私は神に見捨てられることはない、今も御手の中にいる」ということを確認したいと思います。同時に、イエス様も「詩篇 22 篇」を通して最後の勝利を信じておられたように、私達も「私のために苦しんで愛して下さった主が、最後に勝利を下さらないはずがない」と、望みを見て行きたいと願うことです。